



連なった住宅によって構成された共同住宅の共有部分エントランスは、向こう三軒両隣となり一つの近隣コミュニティとなる。そのコミュニティは災害時にも強い近所付き合いを育てる。エントランスは共有の広場とし、自然と人が集まり世代を超えて入居者同士が繋がっていく最適な場となり子供たちの成長に大きく関わっていく。私たちは、共同住宅の特徴である共有部分を「コミュニティとして充実させる空間」とし提案する。

全国の世帯の約4割は借家住まい、都心では5割近く賃貸に住んでおり生涯賃貸住宅で暮らす世帯が増加している。持ち家意識の低下から「取得から借りる」へ変わり、賃貸住宅は「仮住まいから永住」へと入居者の意識が変わってきている。賃貸住まいの世代は30才代の子育て世代と60才代の高齢者世帯が特に多く2極化が進んでおり、同じ共同住宅に多世代同居が増加傾向にあるため、年代を超えたコミュニケーションの構築が大切になる。

Community Entrance 3つの役割

コミュニティ

コミュニティエントランスは、細やかな領域設計を行った住居のプライベート空間と屋外のパブリック空間への緩衝空間である。通過目的だけでなくコミュニティエントランスがつくる緩衝空間は、お互いの世帯が程よく繋がる空間であり、コミュニケーションを構築しやすい環境をつくる事が出来る。

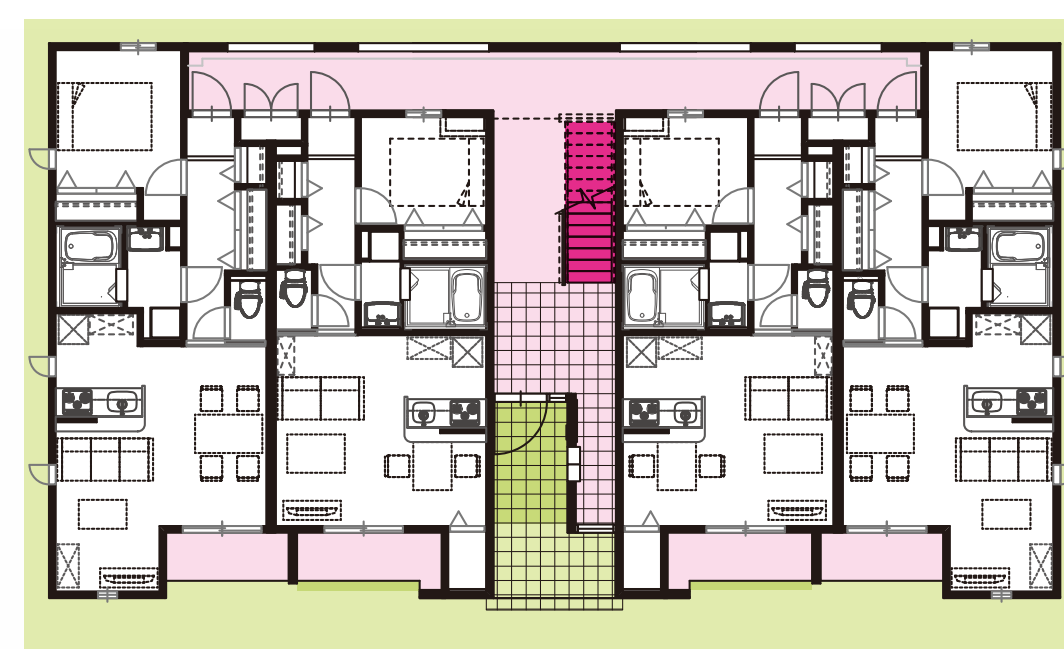
共助

今後一つの共同住宅に多世代同居が進む傾向にある。コミュニティエントランスで構築された入居者の年代を超えた良好な繋がりが「助け合い」を生み、ネットワークが構築される。共働きで子育てをしやすい環境を構築でき、子供を生み育てられることに喜びを感じる事が出来る。

安心安全

向こう三軒両隣の近隣コミュニティは、高い視認性が生まれ、見守り機能が発揮され防犯機能が期待できる。そのコミュニティは災害時にも強い近所付き合いを育てる。また、視覚的に開かれたコミュニティエントランスは、安心して子供たちが遊べる場所となる。

自然と人が集まり、
世代を超えて
入居者が繋がっていく。



□プライベート □セミプライベート □セミパブリック □パブリック
■幼児の遊びの領域

段階的な領域設計

パブリック⇒セミパブリック⇒セミプライベート⇒プライベートと、段階的領域が設定されている。このような領域の構成により、プライバシーを大切にしながら開放的で、お互い助け合うことを可能にし、住民相互間の連携を強める。新しく住民となる住まい手を受け入れ、住民共助の関係を自然に醸成させ、維持させるためにも細やかなコミュニケーション領域の設定が重要である。

遊びの領域設計

子供の強い縄張り意識とグループ意識を想定して、エントランスの中に年代別の遊び場を用意する。

